

乾隆嘉慶年間におけるパスパ文字錢の判読と蒙古字韻の利用

吉池孝一

一

『説錢』(注1)という書は、宋代より民国初期に至る錢幣に関わる29種の著作の影印を収める。『KOTONOHA』45号(注2)では、この書を利用し、パスパ文字が鑄込まれた貨幣がどのように扱われたか、その銘文をどのように読んだかということにつき確認をした。29種の著作の内、パスパ文字錢の記述が見えるものとして先ず『欽定錢録』をあげることができる。これは清の梁詩正等が勅を奉じて編纂に着手し乾隆十五年(1750)に成り、『西清古鑑』に付して刊行したものである。私製の錢譜ではなく勅を奉じて編纂したものであるからには、ここには当時の平均的な学問水準が示されているとみてよいであろう。これによると、「šin」(辰)、「zi」(二)、「mav」(卯)というパスパ文字銘文のいずれも正しく読めていない。次に、70年後の『吉金所見録』がある。これは錢譜として名高いもので清の初尚齡により嘉慶二十四年(1819)に刊行された。翁宜泉という人物の説を引き「šin」(辰)、「u」(午)、「ši」(十)を正しく読んでいる。乾隆十五年(1750)から嘉慶二十四年(1819)に至る間にパスパ文字の判読が進展したのである。翁宜泉の読みがどのように為されたかを知りたいところである。

二

翁宜泉については『吉金所見録』(嘉慶二十四年・1819)の凡例によると「余古金之好、四十餘年來同好者、海昌陳輿伯、廣陵江秋史、北平翁宜泉、同邑趙北嵐數家。」(句読は吉池による。以下同様)とある。これより『吉金所見録』の著者と同時代の北平(現在の北京)の人であったことがわかる。また鮑康著『觀古閣叢稿』(同治十二年・1873)には「古泉彙攷八卷、大興翁宜泉先生樹培著也。」「未及手訂行世、先生遽歸道山。諸城劉燕庭觀察喜海、覓得其稿本、塗乙幾不可辨識。觀察竭三年心目、校録正本、屬鈔胥寫而存之。」(『説錢』43頁)とある。これより翁樹培・宜泉には『古泉彙攷』という未完の手稿本があり、翁氏の死後、劉燕庭がこれを手に入れ、校訂の後に代書人に鈔本を作らせたということがわかる。この『古泉彙攷』がどのようなものであるか知りたいところである。『簡明古錢辭典』(注3)に付された歴代古錢書の一覽表の記述によると丁福保撰『古錢大辭典』(注4)にその一部分が収録されているという。それで『古錢大辭典』を見ると、幸いなことに、『古泉彙攷』の序および元錢の解説部分が収められている(注5)。さらには翁宜泉の年譜までである。それによると、翁氏は乾隆甲申の年(1764)に生まれ、丁未の年(1787)に進士、己酉の年(1789)に國史館會典館纂修官、嘉慶己巳の

年（1809）には貴州司郎中となったが翌年に享年 46 歳で没したという。なお収録された中に「古泉彙攷序」がありそこには「乾隆丙午五月二十二日記。北宋南宋、附以偽齊、是為古泉彙攷卷之五」という記述がある。これは全八巻のうち第五巻目に付されたものであるから、本書は乾隆丙午の年（1786）から遠からぬ年に成ったとみて大過ないであろう。次に、収録された元錢部分の記述を検討する。

三

『古錢大辭典』（第三冊 98 丁。第四冊 228 丁及び 231-233 丁）に収録された翁樹培・宜泉『古泉彙攷』の体例は、貨幣の模刻は無く、銘文のみが示され、その後に「培按」として翁樹培の解説および他書の引用が続く。いま関係部分に 1) 2)・・・と番号を付して列挙すると次のようである。なお解説の対象となる貨幣銘文部分は『』で示し、パスパ文字はローマ字の翻字で示す（注 6）。

- 1) 『大元通寶』 培按；・・・省略・・・。面文蒙古書。「通」在左、「寶」在右、如蒙古書之「至元通寶」錢。以『蒙古字韻』証之、皆合。

翁氏は「大元通寶」と「至元通寶」のパスパ文字は似ているけれども『蒙古字韻』によって確認をすることができるという。

- 2) 『至元通寶』 培按；・・・省略・・・。又蒙古字錢。徑九分、似折二錢、重三錢。「元」「通」「寶」三字、畧如「大元通寶」、背輪郭亦如之。首一字作 *ji*、攷之朱宋文『蒙古字韻』、確是「至」字。

翁氏は「大元通寶」と「至元通寶」の「元」「通」「寶」は同じであるけれども朱宋文（マ。朱宗文の誤写）の『蒙古字韻』によって最初の字は「至」*ji* であることがわかったという。

- 3) 『至正通寶 幕 *yin* 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。背為蒙古「寅」字、字尾與「辰」字同部也。

翁氏は *yin* を正しく「寅」と読み、「辰」(*šlin*) と同韻であることを指摘する。

- 4) 『至正通寶 幕 *mav* 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。蒙古「卯」字、其字尾與「寶」字同部也。

翁氏は *mav* を正しく「卯」と読み、「寶」(*bav*) と「同部」即ち同韻であることを指摘する。

- 5) 『至正通寶 幕 *šlin* 穿上』 培按；此品有小平錢重八分或重一錢、當二錢重一錢八分、當三錢重二錢八分。背為蒙古「辰」字、與「申」極相類。但「辰」从 **𠂔** *š1* 為 *šlin*、「申」从 **𠂔** *š2* 為 *š2in*。江秋史云；*š1* 禪字頭、*in* 讀若「恩」。

翁氏は *šlin* を正しく「辰」と読み、*šlin* 「辰」と *š2in* 「申」の声母が異なることを指摘する。さらに、江秋史を引用し、声母の *š1* は「禪字頭」即ち禪母字で、韻母の *in* は

「恩」のように発音するという説を紹介する。なお、禪母をはじめ、これからでてくる邪母、喻母、日母、心母、審母は「三十六字母」と称される古音の枠組みを示す伝統的な音韻学の用語である。これは『蒙古字韻』でも使用されており、江秋史はそれに従ったものであろう。

6) 『至正通寶 幕 zhi 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。背為蒙古「巳」字。江秋史云；z 邪字頭、hi 讀若「滋」。此是「辰巳」之「巳」。若「四」字則作 shi 也。至「午」「五」則皆作 u。

翁氏は zhi を正しく「巳」と読む。さらに、江秋史を引用し、z は邪母字で、韻母の hi は「滋」の韻母ように発音するという説を紹介する。

7) 『至正通寶 幕 u 穿上』 培按；此品有小平錢、當二錢、當三錢。背為蒙古「午」字、但蒙古「五」字亦作 u。此則當就錢之大小制之精粗審之矣。江秋史云；u 此字頭在三十六字母之外。『蒙古字韻』云、歸喻字母。殆亦若國書之「外」字也。・・・以下省略・・・。

翁氏は u を正しく「午」と読む。さらに、江秋史を引用し、u の声母は三十六字母にはなく『蒙古字韻』で「歸喻字母」（喻母に歸す）とするところのものであるという説を紹介する。いま『蒙古字韻』の「字母」（上冊第五右）をみると、伝統的な三十六字母を掲げ、その最後に「i,u,é,o,e,ũ,i 此七字歸喻母」とする。これは母音と半母音の出だしは「喻母に歸す」即ち特別な子音ではなく柔らかな声立てで始まるということを示したものである。

8) 『至正通寶 幕 zi 穿上 二穿下』 培按；此當二錢也。徑八分、或八分強、重一錢五分、面文瘦而長、與背有 sam,u, šli 者相同。背穿上為蒙古「二」字、下為楷書「二」字。江秋史云；ž 日字頭、i 讀若「衣」。培按；「至」字「十」字皆从此尾、今所見銅印多作 gi 字、乃「記」字、亦从此尾也。

翁氏は zi を正しく「二」と読み、その韻母は「至」（ji）や「十」（šli）と同じであることを指摘する。さらに江秋史を引用し、ž は日母字で、韻母の i は「衣」のように発音するという説を紹介する。興味深いことに、翁氏は「銅印」即ち銅製の印鑑に刻された gi を正しく「記」と読み、その韻母も「二」zi における i と同じであるとする。

9) 『至正通寶 幕 sam 穿上 三穿下』 培按；此當三錢也。徑寸、輪稍濶。背穿上為蒙古「三」字、下為楷書「三」字。江秋史云；s 心字頭、(a)m 讀若「安」。・・・以下省略・・・。

翁氏は sam を正しく「三」と読む。さらに江秋史を引用し、s は心母字で、韻母の(a)m は「安」のように発音するという説を紹介する。パスパ文字表記では「三」は sam で・m 韻尾、「安」は・an で・n 韻尾であるから両者異なるのであるが、ここで「安」のように

発音するとしたのは江秋史当時の北方音に拠ったものであろう。

- 10)『至正通寶 幕š1i 穿上』 培按；此當十錢也。徑寸三分、或徑寸三分半、又一種孔較大、字稍遜。背為蒙古「十」字。江秋史云；š1 禪字頭。按；「辰」字之禪音「産」、「十」字之禪音「善」。「辰」字之š1、其左肩稍圓、此「辰」字「申」字兩頭所由分也。

翁氏は š1i を正しく「十」と読む。さらに江秋史を引用し、š1 は禪母字であるという説を紹介する。次の翁氏の按語はなかなか興味深い。それによると、「辰」と「十」は共に禪母字であるが、翁氏当時の音によると、前者は「産」のように無声帯気の破擦音、後者は「善」のように無声の摩擦音で、両者区別があったとする。これは現代北京語と同様である。ここまでは理解できるのであるが、その後が難しい。おそらく次のようなことであろう。翁氏当時の声母の発音は現代北京語と同様に、「辰」(禪母。現代北京語 chen) と「十」(禪母。現代北京語 shi) は異なっており、かえって「十」(禪母。現代北京語 shi) と「申」(審母。現代北京語 shen) は同じであった。しかしながら、「辰」と「十」は禪母であるから共に š1 とすべきであり、「申」(審母)の š2i とは異なるのだ、と言っているのであろう。

- 11)『至正通寶 幕 seu 穿上 十穿下』 培按；此錢徑寸三分。背為蒙古「戌」字、下楷書「十」字。

翁氏は seu を正しく「戌」と読む。

- 12)『至正通寶 幕γay 穿上 五穿下』 培按；此錢徑寸二分、然亦當五錢也。背為蒙古「亥」字、下楷書「五」字。

翁氏はγay を正しく「亥」と読む。

四

上の記述の中に幾つか興味深い点がある。

一、まず、1) 2) において翁宜泉は朱宗文 (マ。朱宗文の誤写) の『蒙古字韻』を用いてパスパ文字を判読しており注目される。『蒙古字韻』はパスパ文字と漢字を対応させた韻書風の書で、朱宗文の序 (1308 年) が付された写本が天下の孤本として大英図書館に所蔵されている。なお 5) によると、翁氏は š1in を正しく「辰」と読み、š1in 「辰」と š2in 「申」の声母が異なることを指摘している。š1 は禪母であり š2 は審母である。この両者はモンゴル語では区別されないが、漢語では区別がある。š1 と š2 は漢語専用の区別であるが、パスパ文字・漢語碑文などでは一部を除き普通には区別されない。明瞭な区別を持つ資料は『蒙古字韻』であり、その下冊第二右葉には š2in 「申」と š1in 「辰」が左右に並んで登録されている。翁氏はこれに拠ったと考えられる。

二、5) 6) 7) 8) 9) 10) において江秋史という人物の説が引用されている。江秋史は

『古錢大辞典』(第一冊 89 丁右)によると「江秋史錢譜二十四卷寫本。江德量、字成嘉、號秋史。歙人。寄籍儀徵。庚子進士。官至御史。是書一卷」とある。これより江徳量・秋史には写本『江秋史錢譜』があり、「庚子」の年に進士になったことがわかる。先に紹介した『吉金所見録』の凡例に「余古金之好、四十餘年來同好者、海昌陳輿伯、廣陵江秋史、北平翁宜泉、同邑趙北嵐數家。」として登場する廣陵の江秋史がその人である。この記述より、翁宜泉とほぼ同時代の人物であり、この「庚子」は乾隆の「庚子」の年(1780)となる。翁氏は丁未の年(1787)に進士となっており、会試合格者としては江氏は翁氏のやや先輩にあたる。更に『古錢大辞典』(第一冊 76 丁)には「江秋史別傳」という一文が採録されている。それによると乾隆五十八年(1793)に42歳で没したという。没後、手稿本は晉の宋芝山に、次いで山東の初頤園の手に渡り、その後は世に出ることはなかったという。なお、初頤園は『吉金所見録』(1827)の著者である初尚齡・涓園の兄に当たる。それで、7)によると江氏は『蒙古字韻』を利用してパスパ文字錢の判読をしている。これは18世紀後半に当たるわけで、元が滅亡しパスパ文字を用いる伝統が途絶えて以降、『蒙古字韻』を利用してパスパ文字・漢語を読んだ例として貴重な記述である。今のところパスパ文字・漢語の判読に係わるもっとも初期の記録とみることができる。

三、最後に 8) の中にみえる銅製の印鑑に係わる記述が興味深い。翁氏は銅印に刻された **gi** を正しく「記」と読んでいる。今日「**gi**」もしくは「姓+**gi**」などと刻された小型の私印が比較的多く残っておりこれらは「記」と読まれる(注7)。この判読がいつ頃まで遡ることができるか問題となる。今のところ翁氏の判読を最も早い時期のものとすることができる。

以上により、18世紀末に『蒙古字韻』を参照して元代の貨幣や印鑑のパスパ文字・漢語の判読が清朝人によって為されたということをパスパ文字研究史の中に位置づけることができる。

注

- 1) 桑行之等編 1993年、『説錢』上海科技教育出版社。全1220頁。
- 2) 吉池孝一 2006, 「清代古錢書にみるパスパ文字の判読」『KOTONOHA』45号, 14-18頁。
- 3) 高漢銘 1990, 『簡明古錢辞典』江蘇古籍出版社。今は1997年第5次印刷による。760-776頁参照。
- 4) 丁福保 1938, 『古錢大辞典』上海初版。今は中華民国54年本による。
- 5) 丁福保 1938 第一冊 29 丁によると、劉燕庭旧蔵の抄本『古泉彙攷』は、後に福山の

王廉生に、更に庚子の変（1900年）の後は安邱の趙孝陸に帰したという。趙氏のもとに秘されていた同書を、山東図書館館長の王獻唐が請うて借り出し抄本を作り図書館に収めた。これは民国二十三年（1934）のことである。その後、丁福保が山東図書館本により『古錢大辞典』（1938）に収録したという。

6) このローマ字翻字は「言語文化接触に関する研究」（2000年3月24日。アジア・アフリカ言語文化研究所）という研究会において配布した案に修正を加え「パスパ文字の字母表」（『KOTONOHA』37号、2005年12月）として公表したものである。〈子音〉**𑄀** g、**𑄁** k'、**𑄂** k、**𑄃** ŋ、**𑄄** d、**𑄅** t'、**𑄆** t、**𑄇** n、**𑄈** l、**𑄉** b、**𑄊** p'、**𑄋** p、**𑄌** m、**𑄍** f（**𑄍** f1奉、**𑄍** f2非敷）、**𑄎** v、**𑄏** ʃ、**𑄐** č'、**𑄑** č、**𑄒** ñ、**𑄓** š（**𑄓** š1禪、**𑄓** š2審）、**𑄔** ž、**𑄕** j、**𑄖** c'、**𑄗** c、**𑄘** s、**𑄙** z、**𑄚** ʰ、**𑄛** h（**𑄛** h1匣、**𑄛** h2曉）、**𑄜** ɣ、**𑄝** y（**𑄝** y1喻、**𑄝** y2ㄩ）、**𑄞** '、**𑄟** r、**𑄠** q。〈半母音〉**𑄡** ü、**𑄢** ɿ。〈母音〉**𑄣**/**𑄤** u、**𑄥** or**𑄦**/**𑄧** o、**𑄨**/**𑄩** i、**𑄪** or**𑄫**/**𑄬** or**𑄭** é、**𑄮** e。

7) パスパ文字が刻された元代の印鑑には、官印とよばれる大型のものと、私印と呼ばれる小型のものがある。後者の私印には、様々な形態、内容のものがあり、『宋元古印輯存』（楊広泰編選。文物出版社、1995年）や『中国歴代印風系列 元代印風』（黄 惇主編。重慶出版社、1999年）や『唐宋元私印押記集存』（孫慰祖主編。上海書店出版社、2001年）、更にはサイト「古代文字資料館」でその実物及び印影を見ることができる。